

台風来

森岡 正作

この家の

葉にも旅の思ひ出夜の秋
台風来棕櫚の細きを攻め止まず
蟋蟀の全身見せて鳴く哀れ
蓑虫の出で太平の世にあらず
一尾しか焼かぬ秋刀魚に挺摺れり
馬肥ゆる秋何もかも口に合ふ
銘柄に旅の名残りの新ばしり

今の住宅は殆ど塀に囲まれ、門の外は道路で大概アスファルト舗装がされている。登四郎先生に「この家のよく掃かれあり木樅垣」という御句があるが、庭先から道路に出た辺りまで掃いた跡の箒目がきれいに残っているのである。先生が通りすがりによく目にするお宅かも知れないが、住まわれている方の奥ゆかしさまで感じられる。箒目とは何とも清々しいものであるが、公園とか神社仏閣の庭などで目にするくらいである。

昔田舎では掃除検査の日というのがあった。年に一回だったような記憶であるが、どの家でも庭先をきれいにしたもので、役場の係りの人が来て金だ銀だと査定しては、手紙の封筒大の金紙、銀紙を置いて行つた。金紙を貰うと家の軒端の表札の下に一年間貼り付けていた。また小中高でも各学期の終業式前日には大掃除があつて、わいわい騒ぎながらやったものであるが、今は後片付けの出来ない人間になつてしまつた。